

平安文学と月

笹川博司*

抄録：明治5年（1872）11月9日「今般太陰曆を廃止し太陽曆御頒行相成候」という太政官布告第337号が発せられて旧曆が公的には使用されなくなったこと、ならびに街灯や電灯の普及によって、近代の日本人は、天文学的な興味を除けば、日常生活のなかでの月への関心を失っていった。しかし、上代から近世までの長い歴史のなかでは、日本人は、夜の闇に輝く月を繰り返し眺め、天空の月に託して、折々の思いを表現してきたのである。

月の満ち欠けや運行などに対して鈍感になってしまった現代の日本人が古典文学を読み返す際、月にまつわる昔の常識に気付かず、作品理解がおぼつかないことも起こりかねない。月は、身近な存在ただだけに、日本古典文学に頻繁に現れる重要なモチーフの一つである。本稿では、特に平安文学のいくつかの場面や数首の和歌をとり挙げて、若干の解説を加えてみたい。

なお、引用は、特にことわらない限り『新編日本古典文学全集』（小学館）により、できるだけ読みやすい表記に改める。

キーワード：月、竹取物語、更級日記、姨捨山、古今和歌集、有明の月、光琳かるた

1. 『竹取物語』と月

『竹取物語』は、『源氏物語』絵合に「物語の出で来はじめのおや」と紹介されるように、最古の作り物語。9世紀末から10世紀初めには書かれていたと考えられる。作者は未詳だが、作者を論じた最新の書に糸井通浩『かぐや姫と菅原道真』（和泉書院・2019年）がある。かぐや姫は「おのが身は、この国の人にもあらず。月の都の人なり」と言い、「八月十五日」に月の世界に帰ってゆく。こうした物語は、皓々と輝く月の光によって、人々が想像をかき立てられた結果の産物であるにちがいない。月の清浄な光に対比されて、人間界は「きたなき所」と表現され、厭離穢土・欣求浄土という浄土教的な仏教思想にも繋がる。

かぐや姫を迎えに天人がやって来るのは、仲秋の名月が南中する「子（ね）の時ばかり」（深夜12時前後）。「家のあたり、昼のあかさにも過ぎて、光りたり。望月のあかさを、十合はせたるばかりにて、ある人の毛の穴さへ見ゆるほどなり」と、満月の明るさが誇張される。「雲に乗りて下り来て、土より五尺ばかり上がりたる程に、立ち連ねたり」と、地面より150cmほど上がったあたりに立ち並ぶ。穢れを避けるためか、天人たちが人間の住む地上に降り立つことはないのである。

なお、『竹取物語』研究の現在は、久下裕利他編『竹取物語の新世界』（武蔵野書院・2015年）に詳しい。

2. 『更級日記』と月

さて、かぐや姫の物語を思い浮かべて月を眺めた人物が『更級日記』に登場する。作者である菅原孝標女の姉である。孝標女15歳の治安二年（1023）七月に、家の者が皆、寝静まった「夜中ばかり」に、姉と二人、縁側に出て座って「十三日の夜、月いみじうくまなくあかき」「空をつくづくとながめ」た。そんな時に姉が唐突に「ただ今、行方なく、飛びうせなば、いかが思ふべき」（たった今、何処へともなく、私が飛んで消えてしまったら、あなたはどう思うかしら）と妹に問い、「なまおそろし」（薄気味悪い）と思う妹の様子に気づいて姉は慌てて話題を変えたという。早世した姉との思い出を語る場面である。

隈無く明るい十三日の月の輝く空を眺める姉の脳裡には、月の世界に帰っていったかぐや姫の物語が去来していたにちがいない。かぐや姫は、月に帰る年の「春の初め」から月を見て物思いをするようになり、一ヶ月前の「七月十五日」から、いよいよ普通では無く「せちに物思へる気色」となる。姉も、かぐや姫と同様、まもなくこの世から消える予感があったのかもしれない。この夜は、姉と二人で夜が「明るるまで」月を「ながめあかいて、夜明けて」寝たという。十三日の月だから、太陽が

*大阪大谷大学教育学部

昇る少し前に、月は西山に沈んだのである。

二年後、孝標女の姉は子どもを出産して亡くなってしまふ。その際の様子を「形見にとまりたる幼き人々を、左右に臥せたるに、荒れたる板屋のひまより月の洩り来て、児の顔にあたりたるが、いとゆゆしくおぼゆ」と孝標女は記す。この「ゆゆし」（不吉）は、死に対しての形容だけではなく、「月」の光が洩れて来て、児の顔に当たっていることについての心情で、『竹取物語』に見える「月の顔見るは、忌むこと」とする発想である。

そもそも『更級日記』という題名の由来は、日記末尾に見える孝標女の詠歌に由来する。

かう、あはれに悲しきことのは、所々になりなどして、誰も見ゆること難うあるに、いと暗い夜、六郎にあたる甥の来たるに、めづらしうおぼえて、

月も出でて闇に暮れたる姨捨に

何とて今宵訪ね来つらむ

とぞ、いはれにける。

孝標女の詠歌は「我が心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」という古歌を踏まえている。孝標女は、まるで姨捨山に棄てられた老婆のような存在になってしまった自分のもとに、「六郎にあたる甥」が来てくれたことをうれしく思いつつも、今宵は闇夜で「姨捨山に照る月」も出ていないのに、何を思っ来てくれたのか、と甥の来訪の原因理由を助動詞「らむ」によって推量する歌を、つい詠まずにはいられない。

『更級日記』は、菅原孝標女が晩年、なぜこんな人生になってしまったのかと自身の生涯を振り返り、自分の少女時代から晩年までの一生を回想して綴った作品。信仰生活に入る契機も折々にあったのに、それを無視してきた結果だという仏教的な悔恨が語られている。

3. 姨捨山の月

『更級日記』の孝標女の詠歌「月も出でて闇に暮れたる姨捨に何とて今宵訪ね来つらむ」について、さらに明確に理解するためには、『大和物語』第百五十六段「姨捨」の歌物語を詳しく知ることが必要だ。それは、次のような話である。

信濃の国の「更級といふ所」に住んでいた男は、若い時に親が死に、「をば」（姨）に養われてきた。やがて姨も年老い、腰が曲がってじっと座っているだけの老婆となった。男の妻は、姨を嫌って「姨の性格が意地悪で最悪だ」などと男に言い聞かせたので、男の姨への思いも昔通りではなくなり、粗略に扱うことも多くなる。

さらに妻は姨が邪魔で「今までよくもまあ死なないことだ」と思って、姨の悪口を男に言い、繰り返し「深い

山に捨ててしまってください」と男を責めるので、男もとうとう「そうしてしまおう」と思うようになる。

「月のいとあかき夜」男は姨を騙して背負い、姨が一人で下りて来られない高い山の峰に置き、姨が「おいおい」と言うのに返事もせず、逃げて帰って来た。逃げて家に帰って来た男は、これまでのことを思い返す。

この山の上より、月も、いと限りなくあかく出でたるを、眺めて、夜一夜、いも寝られず、悲しうおぼえければ、かく詠みたりける。

わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て
そうして、もう一度、高い山の峰まで姨を迎えに行つて連れ帰ったという。

天空の闇に皓々と輝く月は、唯一無二の存在。その月は、別な場所でも誰かきつと眺めているにちがいないと感じさせるもの。「姨捨山に照る月を見て」男が感じたのは、捨てられた姨が今ごろこの月をどんな思いで見ているだろう、ということだった。そう思うと、悲しくて居ても立ってもいられず、姨をそのまま捨て置くことなんて、どうしてもできなかったのだ。

4. 『古今和歌集』と月

『大和物語』第百五十六段において男が詠んだ歌は、実は、『古今和歌集』雑上に収められている878番歌の「題しらず」「よみ人しらず」だった。『大和物語』の作者が歌の背景を想像し、一つの歌物語を作り上げたということになる。

最後に、『古今和歌集』所収のよく知られた月詠を、六首ばかり挙げてみる。

- ① 木の間より洩りくる月の影みれば
心づくしの秋は来にけり
(秋上・184、詠人不知)
- ② 月みれば千々に物こそ悲しけれ
我が身一つの秋にはあらねど
(秋上・193、千里)
- ③ 大空の月の光し清ければ
影みし水ぞまづ凍りける
(冬・316、詠人不知)
- ④ 天の原ふりさけみれば春日なる
三笠の山に出でし月かも
(羈旅・406、安倍仲麿)
- ⑤ 今来むといひしばかりに長月の
有明の月を待ち出でつるかな
(恋四・691、素性)
- ⑥ 月やあらぬ春や昔の春ならぬ
我が身一つはもとの身にして

(恋五・747、業平)

春の朧月も、⑥のように、人恋しさをかきたてる景物として詠まれるが、月といえば、何といっても澄み切った空気の中かで、隈無く光り輝く秋の月が美しく、数多く歌に詠まれてきた。月の輝く秋は、①のように物思いに誘われる「心づくしの秋」であったり、②の「千」と「一」という対句的な技巧からも知られるように、漢詩文に学んだ「悲秋」であったりする。月は、一年中空に見えるものでありながら、秋の季語となる。秋の月は、春の花、冬の雪とともに、「雪月花」という日本人の美意識の重要なファクターの一つである。

仲秋の名月というのも中国から輸入された思想だが、やがて八月十五夜より「後の月」と呼ばれる九月十三夜の月が好まれていく。そうした感性の延長線上に、平安中期から後期へ、さらに中世へ至る過程の中かで、③のような、冬の月の冷たく冴えわたる凄さにも、日本人は心惹かれていく。

④は、養老元年(717)遣唐使として入唐し、玄宗皇帝に仕え、李白・王維とも親交のあった阿倍仲麻呂の、天平勝宝五年(753)来唐した遣唐使藤原清河と共に帰国する際の送別の宴での詠歌。古今集の左注には、

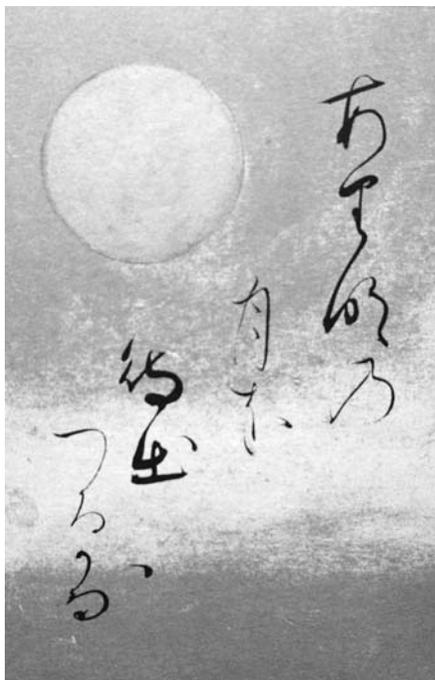
明州といふ所の浜辺にて、かの国の人むまのはなむけしけり。夜になりて月のいとおもしろくさし出でたりけるを見てよめる、となむ語り伝ふる。

とある。夜になって海から昇った月を見て、遠い日本に思いを馳せ、かつて平城京で見た月を重ねて詠んだという。月は、空間のみならず、過去の助動詞「し」と呼応して時間をも超える想像力の触媒として機能するのである。残念ながら、仲麻呂は、帰国の途中、船が難破して安南に漂着して、再び唐に戻ることになる。そのまま帰国が叶わず、在唐五十四年、唐土に没す。

紀貫之は『土佐日記』承平五年(935)一月二十日条に「二十日の夜の月出でにけり。山の端もなく、海の中よりぞ出で来る」と記し、仲麿詠の初句を「青海原」と改作して紹介する。自身の望郷の念を、仲麿の思いに重ねるのである。

5. 有明の月

前節に⑤として挙げた素性詠「今来むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな」は、②④と同様、藤原定家が『百人一首』に採った歌だが、定家は『顕注密勘』¹⁾に「今こむといひし人を月ごろ待つ程に、秋も暮れ月さへ在明になりぬとぞ、よみ侍りけん」(229頁)と記しているところから、「一夜」の嘆きではなく、「月ごろ」の嘆きと解釈していたらしい。それに対して、



あり明の月を待出つるかな

契沖は『古今余材抄』²⁾において古今集の配列から「一夜」の嘆きと解し、「有明の月は十五日より後をもいへど、かやうに待つ心を添へよめるは廿日より後の月なり」(438頁)という。

契沖に従って「有明の月を待ち出でつるかな」を読めば、右上に掲げた『光琳かるた』³⁾の月の絵は不適ということになる。このような望月ではなく、下弦の半月が描かれるべきであった。

定家が『百人一首』に採り、『顕注密勘』に「これほどの歌ひとつ詠み出でたらむ、この世の思ひ出に侍るべし」(215頁)と激賞した『古今和歌集』の壬生忠岑詠「有明のつれなくみえし別れより暁ばかり憂きものはなし」(恋三・625)にも有明の月が詠まれるが、この月も『光琳かるた』では望月に描かれている。また、前節の④の仲麿詠も『百人一首』に採られた歌。やはり『光琳かるた』に描かれるのは望月である。夜になってから昇った月であれば、貫之が『土佐日記』に記すように、有明の月だったはずなのだが。

引用文献

- 1) 『日本歌学大系』別巻五(風間書房・1987年再版)
- 2) 『契沖全集』第八卷(岩波書店・1973年)
- 3) 『光琳かるた』(便利堂・1982年)

(2020年12月26日 受理)